

# 報



# 會

會 岳 山 本 日

55

月 三 年 一 十 和 昭

### 國策の見地

『山を通して國家の爲めに』

國際觀光局のスローガンのやうな此の言葉は佛國山岳會のモットーである。佛國山岳會の創立が普佛戰爭直後のことであるところから、山岳會一つを造るのにも國家再興の氣概に溢れてゐたのだと云はれてゐるが遙るくと山の中に分け入つた擧句連りついた山小屋の壁にこんな文句を發見した瞬間の感じは、正直のところ、餘り愉快なものではない。祖國のためなら乾パン喰つて鐵砲でも擔いでゐる方がよい所を、歐洲三界の山の中などを放浪してゐる身の上には何としても餘り有難くは響かない。山と國家をそれ程結びつけなければならぬものかなど、一理屈をこねたい氣にもなる譯なのである併し考へやうによつては又この二つのものは普通考へる程には懸け離れていないものゝやうでもある。何れにしても國家の政策が山岳人によつて相當重大な關係を持つことは今日の時勢では何としても否定することが出来ない。

一例を挙げれば新内閣の實行綱領の一眼目と呼ばれてゐる電力統制の如きその尤なるものだ。此の問題の作戦本部の觀のある内閣調査局方面では電力の「無統制な開發を拋棄し、國家本位、合理的開發を促進する」と云ふ意圖の下に實際政策の樹立に當

つてゐるらしく考へられる。内閣調査局の政策の基調が國家經濟の立場にあるものであることは謂ふ迄もないが、事茲に至ると我々としても、水力電氣の統制が、單に水力資源の統制や、電價の調整に限らるべきでないといふ事を明確に指摘して置かなければならない。

水力の開發が自然保護の問題と衝突した實例は枚擧に遑ないが、その少からぬものが、電力界に於ける無政府狀態、水利權獲得の爲めの亂調子の競争に起因するものであることは餘りにも周知の事實だ。従つて電力統制と云ふ言葉から先づ我々が自然を無統制な破壊から救ふことを連想したとしてもこれは決して不自然ではない。

また、國策の樹立を使命とし、今や強化擴充されんとしつゝある内閣調査局の如き立場としては、問題を宜敷此處まで擴げて考へるべきであらうと考へる。

我々は日本の自然が、一電力會社や一部投資家の算盤の爲めに永久に葬り去られることに反對なのだ。従つて國策としての電力の統制は勿論國營にも双手を擧げて賛成である。たゞ、國家の政策が經濟のみに立脚すべきものでないことだけは此の際明確にして置きたいと思ふ。國家百年の大計よりして不經濟も時に國益であり此處にこそ綜合的な國家の政策たる國策の意義があると考へるからである。(松方)

### 日本山岳畫協會の創立に就て

中村 清太郎

日本山岳畫協會は一言で申せば好んで山を描く畫家の集團でありまして、今迄夫れ夫れその道に精進して居た人々を横に連ねて、互に親しみを増し、作畫にも發表にも便宜を加へ、鑑賞や研鑽の機を多くしやうといふやうなわけでありまして。

現在會員は至つて少數であります。が、追々その數も増すことを期待して居ます。規約に「山岳を崇敬愛好する」といふ文字を掲げてあります。が、畫の仕事ですから個性の尊重す可きは勿論ながら、さういつた氣持が無ければ殊に山岳畫といふやうな藝術品は出来るもので無いと信ずるのであります。山岳畫を大體風景畫の一種と見ても、その主題たるあの大地の高揚した天邊の氣高さ、壯大さ、不思議さ、力強さ、その美しさには、又格別のものがあると思ひます。又その邊に、特に日本人に俟つ仕事があるやうに思はれます。

斯ういつた會は既に存在して居ていゝ筈のものとも思はれるのでありまして、事實隨分前からさういふ話には折に觸れ持ち上つてゐたのでしたが、同志も少なく兎角銘々の仕事にかまけて中々實現に至らなかつたのです。それが最近熱心な若い人々に依て促進された形で、今度は割合にスラスラと成立に至つたのであります。思へば誠に自然の勢とも申すべきであります。

草創の際に廣く會員を求めざるも無いのであります。が、少數とはいへ現在の會員中には、夙く明治年代から山岳を描いて世に示した先覺者も居られ、一方には長るべき前途を有する年少の作家を含み、又後見といふやうな役廻りに山岳畫には因縁甚だ深き山岳文學の老先達を煩はすを得たのは、會の門出として大に心強い感に致すのであります。

展覽會は自然會の主な仕事で、今の所本年初夏に第一回展覽會を催す豫定になつて居りますが、未だ會場は確定して居りません。何れにしる差當り作品公募といふやうな事は行はず、先づ會員の作品と會場壁面の許す限り會員外の同志の作品とを陳べやうといふ方針であります。日本山岳會とは一面正に同胞の會

と申すべきものであり、同會員諸賢の親愛を希ふ次第であります。次の規約は草案ですが略確定したものであります。

日本山岳畫協會規約

- (一)本會ヲ日本山岳畫協會ト名ク
- (二)本會ハ山岳ヲ崇敬愛好スル畫家ヲ以テ組織ス
- (三)本會ハ山岳ニ關スル繪畫ノ研究發表並ニ會員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- (四)本會ハ適當ノ時期ニ會員ノ製作セル山岳畫展覽會ヲ開催ス
- (五)本會ハ隔月ニ會員會ヲ催ス、時宜ニ依リ同志ノ懇談會ヲ兼ヌルコトアルベシ
- (六)本會ハ會員ノ外ニ顧問ノ制ヲ設ク
- (七)會員中ヨリ幹事若干名ヲ選出シ會務ニ當ラシム
- (八)本會々員タラントスル者ハ會員三名以上ノ推薦ヲ要ス、但入會ノ許否ハ會員ノ決議ニ依リモノトス
- (九)本會規約ノ變更其他ノ重要事項ハ會員會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム
- (十)會員會ノ決議ハ全會員三分ノ二以上出席シ其ノ出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス
- (十一)會員ハ年額金拾貳圓ノ會費ヲ納ムルモノトス、新タニ入會スル者ハ入會金五圓ヲ納付スベシ
- (十二)會員ニシテ本會ノ趣旨ニ反シ又ハ會費納付ノ義務ヲ怠リタル者ハ會員會ノ決議ニ依リ除名ス

南洋委任統治諸島の山々

行方沼東

歐洲戰亂の結果我が委任統治の領域に編入せられた南洋群島は太平洋中に散在する六百有餘の小島であるが、之を大別してマリアナ、カロリン、マーシャルの三群島とする、その内マーシャル群島だけは海拔最高約三—四米位の環礁群で、山と稱すべきものはないが他の群島中には小さいなりに山も相當あり多くは人跡の絶えた地なのである。

マリアナ群島は小笠原列島の南に續き富士火山帯の延長せるもの、最北端のウラカスは全島緑地なしといつてよい不毛無人の活火山島で、之に續き弓狀に多くの火山島を見る。バガンは稍大きく南北二座の噴火口を有し山頂の物凄き爆裂口と噴煙とを洋上より望見し得る。サイパンはマリアナの主島で古領當時軍政廳を置かれたところ、今は民政支廳がある。島の中央部には高低幾つかの山が起伏してゐる。主なるものは、

タポーチヨ山(獨逸の海圖による 標高 四六六米 日本水路部による 標高 四七四米)

テブパン山(獨逸海圖による 標高 (三二七米)以下)

獨逸版海圖四號號により列記すれば マービ山

島の最北端にある突角の丘。

カラベラ山(獨逸山) 島の北端カプトロ(牛岬)より南約四キロ八にあるタナバク部落より約三キロ五。

ピトスカラベ山 カラベラの南西約一キロにある山頂岩角突元として聳ゆ西麓マトイス部落より約一キロ八。

アチニューゴ山 カラベラの南西約一キロにある。フライラント山

ガラパンの北東二キロにあり此地方を開墾した人の名を山名としたものといふ。

フアナガン山 ガラパンの東一キロにある

フアリビ山(水谷山) ガラパンの東一キロ五フアナガンの南東にある山中濕分多く土地常に濕潤してゐるによつて山名となる。

ロエダ山 西微南約一キロにある。

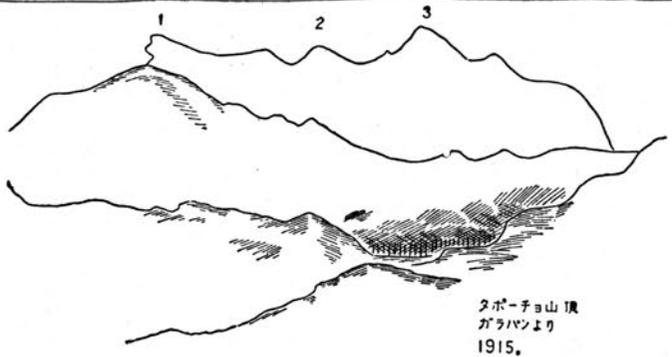
ダンダン山 西微南約一キロにある

タポーチヨ山(女の乳房の山) 西微南約一キロにある

タポーチヨの南西四キロ八にある女の乳房の様な形をして平坦な丘上に突起してゐるので海上から好目標になる。

ナフタン山 島の最南端にある丘この附近に土人の舊墓地があるといふ此地に往時土人多く住居してゐたと傳ふ現在全くとく住居者がない。

ハグマン山(蛇饅山) 島の東南端ラウラウの岬角を形成するところの丘。



タポーチヨ山はガラパン市街よりタナバク部落に通ずる道路を約〇・八キロ行つて右折し、フアナガン丘の下に達しそれより熱帯林中に入り四時間位で頂上に達する。山道は全くなく島民の案内を同道せねばならぬ、山頂三つに分れ南方のもの最も

高い、附近一帯にザバナールと稱する(六、七尺もある芒の一種)禾本科植物が蜜生してゐる。珊瑚礁石灰岩より成り鋭い岩根を形成してゐるこの山頂よりガラパン側即ち西方には緩傾斜であるが、東面は多くの斷崖があり險絶を極めてゐて人を近づけない。

發行中水筒の要なく喉が乾けば椰子の實を切つてその液汁を飲む、山頂を除くの外一帯に盛なる熱帯林の繁茂を見る、私は大正十四年十月十四日に發行したが、全く中腹以上に道なく案内の島民が山刀を振つて雜木を切り開きつゝ行つたので、割合に長時間を要した。

ガラパン發 午前 七—〇  
 タポーチヨ山 同 一—三〇  
 タポーチヨ山發 午後 一—〇  
 ガラパン着 同 三—三〇

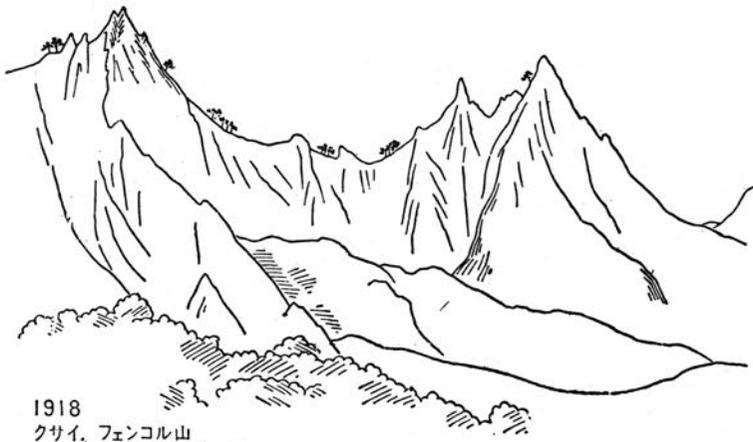
カロリン群島には、トラツク、ポナベ、クサイ、ヤツブ、バラオ等割合に大きな島がある。トラツク島のラロケン山(春島にある四一四米)(標高は獨逸版の海圖による)

ウイポット山(水曜島にある四二二トロン山(夏島にある三六六米)ポナベ島の

トロコレ山 八七二米  
 トロトム山  
 クブリジョ山  
 ナンキヲブ山何れも約六〇〇米  
 クサイ島の  
 フェンコル山 六五七米  
 ベーチエ山 五四二米

メーテリスモニューメント山 五三〇米

(日本水路部海圖によればフェル  
コル六二九米ベーチエ五九二米とあ  
る)等が山といつてよいものと思ふ  
不幸にしてヤツブ、バラオの山の記



録が手許に見當らぬがバラオ本島に  
はマケル山、ウンケシウ山、エキ  
ガロウト山等がある。只ヤツブ、バラ  
オ兩島で特記すべきはこれらの丘陵  
上に食虫植物として有名な『ウツボ  
カヅラ』の群落が盛に見出せること

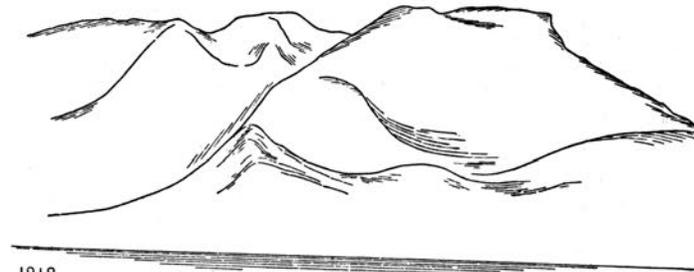
であつて、私は兩島の海軍無線所附  
近で、澤山之を採集した。これは本  
州中部山地の高山植物同様に學術上  
の貴重なる資料で、我國唯一の産地  
故亂獲を禁止して保護すべきものと  
考へる。

1918 フェンコル山  
クサイ、チヤブロール港にて

クサイ島のフェンコ  
ル山はチヤブロール港  
の直上に突兀として天  
空を摩す様小きき槍ヶ  
岳といつて決して過言  
と思へない。遙かの洋  
上より最も顯著に窺見  
し得て航海者の好目標  
となるものである。山  
頂は瘦尾根で岩角露出  
し南洋群島中の一異彩  
である。この山へは一  
九一〇年(明治四十三年)獨逸探險隊が発行  
したといふことであ  
る。  
ベーチエ山の頂上は  
稍廣く平である。  
トラツク島の山は多  
く熱帯樹林に包まれた  
美しいもので所々に鮮  
緑色のサバナ地帯が  
窺見し得られる。

ラロケン山には山頂樹木なく山腹  
には大瀑布があり又山中に高さ三米  
巾三米のウイダンの瀧があるといふ  
ことである。  
ポナベ島のトロコレ山はこの島の  
最高峯であつて群島中の最高峯でも

ある。山頂は圓頂形で巒蒼たる樹木  
が山全體を包んでゐる。これより北  
西、南西北北東に向つて山脈を派出  
しトロトム、クブリリジヨ、ナンキヲ  
ブ等を起してゐる。これらの山間に  
は幾多の谿谷を藏し小規模とはいへ  
人跡未踏のところが多い。



1918 ランガール嶺地よりトロコレ山を望む  
ポナベ

以上我が南洋群島の主なる山を書  
いたがこれらは皆島そのもの、狭い  
のに伴つて高いのではないが一面から  
見れば島全體が一つの山を形成して  
ゐると考へて差支なく平坦の地とて  
は極めて少いのである。クサイ、ポ  
ナベ等の山地には玄武岩の露出する

處を多く見かけた、大古の火山が陸  
地の漸次沈下に従つてわずかに海上  
に残されたものではなからうか。  
私はサイパン島に一年半ほど居た  
その後船で二三回群島中を巡つて歩  
いただけで山のことについても詳細  
は判つてゐないが、その概念だけで  
もと思つて書きつけたのである。

### ◆會員通信◆

#### 灘スキー場

前略三月初め故里の近くの灘スキ  
ー場(京都府北幸田郡鶴ヶ岡村)へ  
行つて参りました、同地は舞鶴要塞  
地區に近い爲に參謀本部の地圖もな  
く交通も一寸不便な山奥ですが、近  
くに京都府で一番高い千米級の頭布  
山もあり、面白い二日を何時に變斷  
ず送りました、それは兎に角として  
私はこゝの通稱二本松の近くで所謂  
兩側雪庇を見ました、話には聞いて  
居ましたが實物は初めてです、又慶  
應の登高行區號で最近も刺戟されて  
居ましたのでお報せ致します。西向  
登りの、傾斜度約廿度幅約三米の木  
も岩もないコンベツクスな尾根の兩  
側にありました、型は兩側ともよく  
似てをり雪庇にしての突き出しのあ  
る邦は比較的少く(約一米半)他はそ  
の兩側へ(尾根の上下)雪壘(こん  
な言葉があるかどうかは存じません  
が)として續いてをり(數米)高さは  
一番高い所で約半米、硬度はスキ

で踏みつぶせる程度でした、尙兩方  
の切斷面をしらべてみたり、又概箇  
所の風向きを考へて見て多分同時に  
發生したものと思ひました。(谷博)

#### 日本山岳協會成立

(前略)陳者今回同志相圖り日本山  
岳協會を結成致候本會は山岳を崇  
敬愛好する畫家を以て組織し山岳に  
關する繪畫の研究發表並に會員相互  
の連絡親睦を圖るを以て目的と致す  
ものに有之適當の時期に會員及び同  
志の製作せる山岳畫展覽會を開催可  
仕先づ今年初夏の候に第一回展覽會  
を催す豫定に有之候

昭和十一年三月

日本山岳協會

會員 足立源一郎

英木猪之吉

石井 鶴三

石川 滋彦

小菅 徳二

丸山 晚霞

中村清太郎

染木 照

武井 眞澄

吉田 博

顧問 小島 久太

藤木 九三

(事務所 茨木猪之吉方)

敬具

# 圓型天幕一試作品

爺々岳に登る爲に我々東大山岳部  
 一張りの圓型天幕を造りました。  
 之は京大白頭山遠征隊で使用された  
 ものを大體踏襲したものです。此の  
 種天幕の來歴のことや蒙古人の包の  
 ことなどは宮崎氏が詳しく書いてお  
 ますし、ケルン十一月此の天幕  
 の設計をする時に、ラットレッヂの  
 本(一九三三年)に一頁足らず書かれ  
 てゐるのを讀んだことでしたが、知  
 り度く思ふ所がどうしても十分の  
 こめなかつたことを考へて、私はた  
 や、我々の造つた圓型天幕(Arctic  
 Tent)はどんなものかと云ふこと  
 及び我々の使用の經驗とを、言葉と繪  
 とで出来る限り判つて頂ける様に書  
 いて見たいと思ひます。

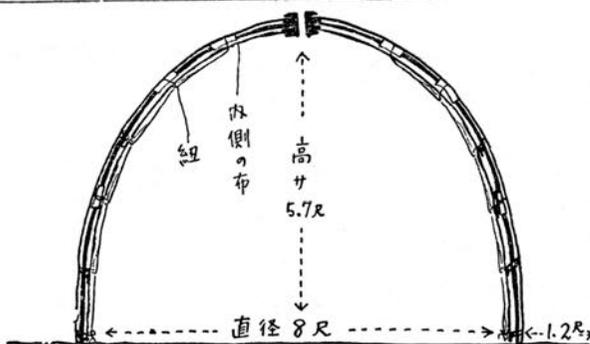
らうかと我々を心配されたのですが  
 千四百米餘の火口原の一端で張つた  
 時には、深い雪に埋められてこんな  
 恰好である事が反つて雪に押し狭め  
 られたり痛めつけられたりすること  
 から救つて呉れました。難澁を極め  
 た出入のことの外は、雪に埋もれて  
 ゐる點では何の心配もなく天幕は極  
 めて丈夫であり安定してゐました。  
 形の壊れることもなく、まはりの幾  
 らか凍つた雪の壁は大變良好な背の  
 もたれとなり、樂な姿勢で居ること  
 が出来たのです。

天幕の骨組みは八本とし、それら  
 は天幕の頂點で軸に穿かれた孔に差  
 込まれます。各骨は三枚張りの竹製  
 で三本纏ぎにしました。(第三圖)此  
 の竹に天幕をしまふ時にはひどい濕  
 氣のために張り合せの糊がはがれて  
 了ひ弱いへな／＼したものになつて  
 ゐました。

此の仕掛けのフレームでは心もと  
 ないので、強い風に耐えうる様に、  
 十一本の綱が張れる様にしたのです  
 頂點の軸に三個、八つの稜の丁度肩  
 の邊り—不正確な云ひ方ですが—に  
 夫々ナスカンを附けました。綱の一  
 端を一尺餘りの杭の中央に結びつけ  
 て置き、杭を堅く踏んだ雪の中へ深  
 く固定してから、綱は此のナスカン  
 を通して引きしめるのです。この張  
 り綱は天幕を極めて丈夫なものとし  
 ました。それからグラランドシート、  
 は巾一尺二寸のツバ型に外方に出さ  
 れてゐて、八角形の各角々にも亦杭

を打ちこむ様になつてゐます。ツバ  
 型の布は例の雪など載せ風のはらむ  
 のを防ぐ布です。杭をこの様に打つ  
 と、天幕は宛かも雪の上に釘附けに  
 され、縛りつけられたかの様です。

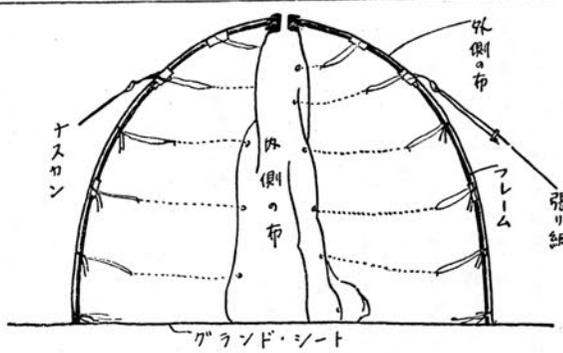
第一圖



雪に埋もれる迄の二日間のかかりの  
 風にも十分耐へてゐましたが、天幕  
 をとりかたづける時になつて見ると  
 上記二つの耐風の仕掛けは大層厄介  
 な代物でした。すべての綱は先づ切  
 断して了ひましたが、例のツバ型は  
 み出し布の爲には、深く堅い雪を掘  
 り掘げねばなりませんでした。  
 天幕は二重の布から成つて居ま  
 す。外側は緑色の風を通さない布、グ  
 ラランドシートは此の布に縫ひつけ

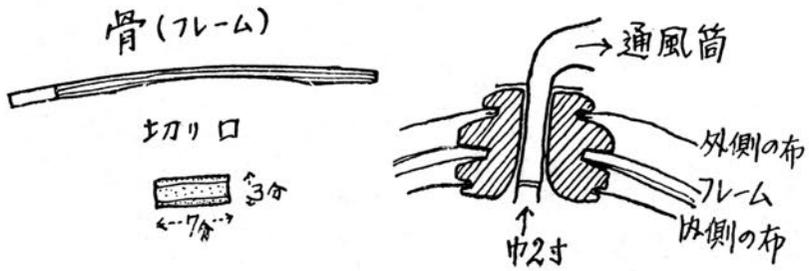
あります。この布の内側で各稜に當  
 るところに紐を附け、フレームを縛  
 りつけます。内側の布は白金布半防  
 水、之はハトメを通して輪になつた  
 紐を次々にくゞらせてゆくやり方  
 で、フレームに張り付けてゆきま  
 す。この爲には輪型の紐に細い導き  
 紐をつけて之を内側の布のハトメに  
 豫め通して置き、抜けない様に先端  
 には金輪を結びました。此の導き紐  
 は天幕の中にある時、食器や鉛筆を

第二圖



しばつたり、手袋や手巾を掛ける  
 ことが出来て、中々愛敬のある存在  
 でした。内側の布を張るために紐を  
 用ひるのは餘り感心しないと思ひま  
 す。

第三圖



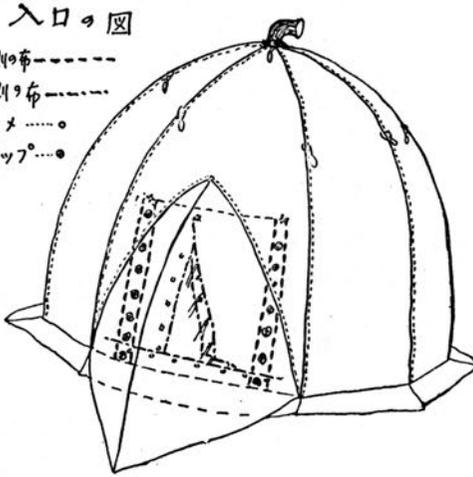
くを要したことでした。  
 出入口は高さ三尺、三重になつて  
 ゐます。内側の布は、巾二尺五寸の  
 矮形のカーテン式、兩側をスナツプ  
 で留め、開いてゐる時は上へまくり

フレームを組み立て、ゆく時に、此  
 らの紐は錯雑を極めるのです。内側  
 の布は別にして置き、スナツプの如  
 きもので簡単に止めるだけでいゝと  
 思ひます。此の天幕は架設作業中々  
 簡單ではなく、張るだけに一時間近

上げて置くのです。外備の布は五寸の高さの闊布の上に、逆丁字形に切りました。閉めるのは三重にかさねて輪型の紐をくぐらせてゆく仕方です。更に此の外側に、ヤム上からかぶり布をつける。

之だけで十分風は防ぎ得ると思ひます、然し今度の場合は出口は完全に雪の下なので、出入りの度毎に天

第四圖



幕の中は雪まみれとなりました。此の様な状態では闊布とかぶり布とでは雪を防ぐことは出来ない、反つて逆効果をもつに至るのです。寧ろかなりの大きき天幕であれば、かぶり布を縫達させて、一種の支鬮を形造り入口をはつきり二つに分けて天幕内に雪の入るのを防ぎやり方が完全なものであらうと思はれます。

通気筒。第三圖の様なブリキ製の通気筒を天幕の頂點に装置しました。之は外から差込みその向きは内側から廻すのです。通風の調節の爲には別に開閉弁を設けず適當に内部からタオルを押し込んで栓としました。

恒風の時には此の様式の通気筒では開けば直ちに汚れた空気を逃すことが出来ましたが、風向きが少し變ると雪がたまつてしまつたり、又筒と木軸との間が凍りついて動かなくなりたり、融けた水滴がボタ／＼と垂れて来たりしました。此の種の通気筒はかなりの熱を奪はれるとしても大して寒さを感じずることなしに換氣しうるの必要なものだと思ひます。が上記の如き缺陷を補ふ爲の工夫が更に要ると思はれるので、筒の大ききさもつと小さくて十分だと考へます。

窓なし、セルロイド縫ひ込みの窓を附けるつもりで、さて場所を何處にしやうかと色々考へた揚句、窓をあけたくなくなつてしまつたのです、何と云つても窓は必要です、出入りの不自由な天幕の中で外の見えない事は大変苦痛でした。

カタテルメモーターの測定によつても此の天幕は可なりの保温力を有する様でした。然し、融けた雪、炊

事の際の水蒸氣などのために天幕の内面はしつとりと濕り、半防水の金布の内張りはずつちより濡れて、屢々つら／＼となつたりボタ／＼と水滴が垂れることさへありました。雪、風、寒さに耐えるものとして此の様式の天幕は優れたものと思ひますが、次の諸點は更に改良と工夫を要すると思ひます。

フレームを破損し難く且つ軽くする爲に材料、形を考へること。

入口の改良、通気筒の恰好、窓、緑色の布地が少し暗すぎる等。

最後に此の天幕は總重量三貫五百碼五分、グランドシート九碼五分を要したことを申しそえて置きます。

(田中太郎)

### 地元の純情

この冬の始め白馬へ行つた時、久しぶりで對山館を訪ね百瀬さんに御無沙汰を詫び乍ら大澤小舎の近くに眠る我が岳友の墓の様子でも聴きたいと、大糸線への時間を利用してもう數年歩いたことのない大町の通りを歩いて行つた。對山館の前まで來ると日當りのいゝ玄關先で大根を珠數つなぎに結はへてゐた男が突然立上り鉢巻をとつて懐しさうに近寄つて來た。

その男は七八年前僕が學校の連中數名と白馬から劔の方へ越えた時行を共にした人夫のNであつた。人の好い又よく働らく男で僕も當時の山旅を想ふ度に鉢巻をした彼の人の良きそやうな純朴な顔と思ひ起すのであつた。随分長く會はないのに矢張り未だ御互ひに忘れないうでゐたのかと何だか嬉しい様な氣がした。

恐らく僕等のグループだけのことはあるまいと考へられるのだが、山登りを愛する者は山登りの行爲そのものを愛すると共にその山麓の人情とか風習といつた様なものにも亦少からず心を惹かれるに違ひない。實際僕達は過去の山旅を回想する度にその山麓の村人達や行を共にした人夫衆の純眞さ・訥朴さを何回となく心に描くのである。物質文明の氾濫した社會に見ることの出来ぬ山人の純情さに心を打たれた経験は、極めて最近登山を始めたといふ人達でない限り殆んど大抵の登山家が持つてゐる貴い経験の一つである。

南北アルプスは勿論上越でも秩父でもその山麓、登山口には「山」に來たことを感じさせるこの何物よりも美しく尊い純情が數年前までは至る處にあつた。登山者は山の中やその麓で村の人達に行き會ふと何時でも心から「今日は」とか「御大事に」とか挨拶を交はすことが出來た。だが現在はどうであらう。僕は「今日は」かつた。黙つてゐた方がよかつた。」と自分で自分を嘲りたい様なバツの悪い變な思ひを、こゝ三、四年幾度繰り返へしたか判らない。エトランゼの氣持で「今日は」と挨拶しても村の人達は心の扉を開かうとしない時には微かな敵意をさへ示してこの侵入者を警戒してゐる様に僕の眼には映るのだ。これは果して僕の僻みであらうか。或はそんなセンチメンタリズムが今時通用するもんかと嘲ふ人があるかも知れない。ホテルが建てられドライブウエーが開かれた今日の山と數年前の山とが同じであつて堪まるものかと言ふ人もあらう山麓の人情の變るのも寧ろ當然過ぎる當然かも知れない。こんなことを考へるともなく考へてゐる時、何といふ皮肉か「鹿島鐵の勇者、地元の純情を蹂躪」なる大標題のある夕刊を友人から見せつけられて、實際のところ僕は驚くより苦笑せざるを得なかつた。地元の純情を蹂躪はよかつたね一體今蹂躪される様な純情が残つてゐるのかい」と僕は夕刊を見て心配してゐる友に言葉返へさざるを得なかつたのだ。

先月號の會報に松方氏も書いてゐた如くかゝる記事を書かれた早大の連中こそ好い面の皮で、當時早大先輩團の中にさへ火の無い所に煙は立たぬと言ふ様な論法で學生を詰つた人があつた位だから何も知らない新聞の讀者等はアルビニストなんて酷いことをするもんだなあと思つたに

違ひない。

此の欄で早大のために辯解しようといふのではないが、當時の事情を調べてみると今後アクシデントを起した場合、當事者は勿論その救援作業に従事する人々は餘程慎重に冷静にそして時には小利巧にさへ廻らねばならぬといふことが痛感された。遭難救助機關が確立されたらこんな不快な心配も不要となるだらうが、それまでは嫌なことでも地元の一部の人々に對しては慎重さを失はぬ様に努むべきであらう。今度の早大事件を通じて見ても「地元の純情」は餘りにも失はれ過ぎてゐる様に僕は思はれた。宿屋や山小舎や案内人は好きや道樂でやつてゐるんじやないといふ事が判り切つてゐるとは云ふものの……

汽車が開通し一泊十圓とかいふ豪華な部屋を有する山小舎が出来る様になつた今日それこれも止むを得ない發展の結果かも知れぬが果してこれで好いものであらうか。大町にも四谷にも細野にも僕の親しいそして好きな人々が居ないことはない。いや居ないどころか随分御厄介をかけた恩人もゐる。にも拘らず「どうも大町や四谷はすれてゐていけないよ」といふ世評に反對することが出来ないものである。此處に地元の考へなければならぬ問題が横たはつてゐるのではないだらうか。若し以上の凡てが僕の認識不足ならば幸である

(渡邊公平)(二二・二・一一)

## ◆ ◆ ◆ フランクの來朝

數年前はるばるチロールの片田舎からやつて来たお蔭で我が國のスキーヤーにヘッペリ腰のフオームが流行したので想ひ出す例のシュナイダーが最近「Auf Schi in Japan」といふとんでもない本を出した。シュナイダーをスキーの神様扱ひにしたリ、世界的英雄に祭り上げたりした連中は是非讀するがよい。とかく日本人は外國人と見ると、その人の教養とか人格とかを全く考慮しないで、程度以上に馬鹿騒ぎをして却つて輕蔑される傾きがあるが、このシュナイダーなどはその好い例である。此の本に就いてはいづれ稿を改めて御紹介申上げることにするが、シュナイダーを祭り上げず張本人のフランクと言ふ人物が折も折丁度日本に來て居るので、思ふことを斷片的に述べて見たいと思ふ。

フランクは今更申す迄もない程我が國では有名な山岳映畫の製作者であり、今度の來朝は日本の眞の姿を觀察し、日本の山岳映畫をつくり又日本を題材とする劇映畫を製作するためだといふ事である。私は固より映畫批評家ではないのであるから山登りやスキーを愛好する者の一人として彼の來朝に就いての種々な問題に觸れたいと思ふ。

フランクの日本に對する認識の程度の問題である。シュナイダーは日本の事情など特に理解しなかつた。スキー一術さへ教へ、又自分のスキーを見せて歸ればそれでいゝのであつて、なまじつかな本を書いたものだからお里が知れたといふ位の話で済んだのであるが、フランクはさうは行かない。とにかく日本の山登りなりスキーの發達位頭に入れて置いて頂かなくてはとも日本を海外に紹介するやうな映畫は製作出来ない。そこで彼の來朝の事情を考へて見るに、當事者の一人である川喜多氏は彼を招聘した意圖を次のやうに述べて居る。

「フランクの得意とするカメラ藝術に撮された日本の姿。私は、こゝに新しく、美しい日本を、映畫の中に建設して行きたいのであります。世界に、もう一度、日本を見直す機會を與へたいのです。」(傍點筆者「山小屋」第四十九號 二五頁)

近年日本に對する世界の認識不足を是正し、海外に正しい日本の姿を紹介しようとする所謂國際文化事業が熱心に行はれつゝあるのであるが、フランクの招聘もかゝる意圖に出たものとして、彼の日本に對する認識の程度に注目しなければならぬ。今日のドイツに於ては、勿論充分ではないけれども國外に出ることなくして普通一般の日本に對する常識的な理解に事缺かぬ筈であるが、彼の

頭の中には日本に到着する迄、フジヤマ、ゲイシャの程度の智識しか無かつたのである。

勿論單なる一個の映畫製作者としての彼に學術的な日本研究を豫めやつて來いなどと言ふ譯ではないが、東京驛に着いて丸ノ内の近代建築物に驚いて我が近代的な文明の發達といふ點に全く認識不足振りを曝露した事は、彼の教養の程度を窺はしむるに足ると思ふ。日本語は勿論英語でさへも語り得ない彼が全然豫備的智識なくして短日月の間に日本紹介の映畫を作らうといふのだからその心臓の強さに呆れるが、その指導に苦勞してゐる觀光局の人を見ると氣の毒に堪えない。

第二に問題となるのは彼に對する我がスキー界、山岳界の態度である。フランクが純然たる映畫人であつて決して山岳人とかスキーヤーとして世界的に名聲を有するものでないことは判りきつた事であつて、彼を迎ふるには映畫界の人達を以てすれば充分である。彼の作品か必ずしも我が國の登山家に賞讃せられなかつた所以は我が國の山岳界の水準が彼の作品に映し出されるものに比して劣るものでなかつた事によるのみならず登山家の立場からは到底許すべからざる場面が屢々描かれたことがあつたからによるのである。勿論フランク自身も商品としての自己の作品が一般民衆の一番低い文化層を満足させることに依つて賣れるのだとい

ふ位のことでは知つてゐるであらうから、従つて自分が何も山岳家であつたり、スキーヤーである必要もないのである。偶々シュナイダーやトレンカーのやうな傀儡を使つて、之を利用することに成功して彼の今日の名聲を得たものと言ふ事が出来るのである。従つて我が山岳界は全く彼の來朝に無關心であるべきである。然るに我が一般山岳界の態度にはあまりに無批判にフランクを持ち上げすぎる傾なしとしない。誠に驚き入つた奇怪事であり、フランク歓迎會が都下山岳團體合同で開催されるなど若し事實とするならば、我が山岳界の名譽のため遺憾至極である。この主催者は日本紹介者として、外國人の教養に對する自己の認識不足が我が國の眞の姿を世界に紹介することを如何に阻害して居るかを一應考慮して欲しい。こんな例は從來とても屢々繰返された事で日本人のおめでたき加減を世界に紹介することの他何物でもないことをよく考へねばならぬ。

第三に、ではわざ／＼やつて來たフランクに何を望むかといふ事になる。映畫界の方からフランクへの注文はもうちゃんといふ事にして居るであらうから、今此處では我が國の自然の美しさを紹介をやつて貰ふことだけを注文しよう。海外宣傳映畫といふものは現在のところ先づ日本といふ國を全然知らない外國人に見せるためのものでなくてはならぬ

い。だから突然奇妙な服装をしたお祭やみすばらしい農家などを見せられた外国人は全く日本に對する認識を誤つてしまふ。とにかくエキゾチックな歐米とは全く異つた文化を持つ國だといふ先入観を持つてゐる人達に神祕の東洋の國を紹介する際に精神文明を如何に強調しようとな無駄である。物質文明的方面の紹介こそ無智な外人に正しい認識を與へるものである。フランクの好奇心が如何に表現されるか知らないが、彼には、文句の出ようもない山岳風景でも撮つて行くことを勧めたい。若しスキーヤーでも登場するならば一流の人達を煩したい。とにかくフランクは日本滞在中一生懸命に勉強して行き詰つた自分の山岳映畫に新生面を開くやうに努力することが彼にとつて最も大切なことだし、今が好き機會であると思ふ。

要するにフランクの來朝によつて我々が得たものは、日本の山岳界の教養の程度がまだまだ國際的に進出する程の實力を持つてゐないこと、海外への宣傳事業に對する頭腦の幼稚なことが見事に曝露されたといふ憐れむべき事をはつきりと見せつけられたといふことなのである。

(中原健次)

### ◆新刊紹介◆

#### 一 修驗行者の旅日記

『日本九峯修行日記』

我國登山道の發展に於ける修驗道の功績は、今更贅言を要せぬものであるが、本書はその一派の行者故野田成亮翁による修行日記であつて其は又と得難い、纏まつた資料であるこれによつて、我々は彼等行者の行蹟、風習と同時に、當時の我國の郷土風俗の半面をも知り得るのである。原本は、六巻から成る寫本であるが、危く散佚を恐れ、その全部が成亮翁壹百壹回の忌辰を期して、昭和十年一月杉田直氏の努力により複製公表されたものである。

野田家は、宮崎佐土原にあつて、代々修驗道を傳へてゐたらしいが、泉光院成亮翁もこの家に生れ、修驗道の布教に努め、一方揚柳軒一葉と號し、俳句をよくし、天保六年(一八三五年)八十歳を以つて歿した。修驗道の家に生れ乍ら、全國行脚をせぬのは、恥であるかと考へ、齡五十六にして領主の許を得、翌年五十七歳その途に上り、文化九年九月より文政元年まで滿六ヶ年餘を以つて無事故里の土をふんだのである。『風雨寒暑とたゝかひ、難行苦行を續け托鉢行脚をなし、全國の名山大川を跋渉し、名所舊蹟をさぐり、神社佛閣を巡拜しつゝ各地の政事、人情、地理、風俗に至るまで、筆に委せて

記したる旅日記』が本著なのである。毎日々を追ふて丹念に、簡素に(今時の我々には、苦手な文體であるが)かゝれ、當時の行者の『難行苦行』の跡をよく傳へてゐる。方々の村から祈禱を頼まれて思はず十日位を滞留したり、衣類の洗濯が乾かないで本意なく二三日滞在する。長崎ではパレン芝居を見物して驚き立山に登つて雷鳥に驚異の眼を瞪るなど、そうした放浪の生活が、また翁の得意とする俳句を織混へて巧みに簡素に書き記されてゐる。

白山に登つて『六月に雪踏む峯の恐ろしし』富士に登つて『見下せば三千世界丸裸』など、また『ゆう／＼と行脚も桃の節句かな』など、筆者の境地がよくにじみ出て居る。

この日記は、丹念に讀めば讀むほど、面白いものだが、本書は六百頁近い大分なものであるからこの日記の詳細を紹介するのは他の機會にし、こゝでは翁の登山した山について一言して、紹介に代へやう。『九峯』といふは、英彦、石槌、箕面、金剛、大峰、熊野、富士、羽黒、湯殿の九峯であるが、翁の登つたのは必ずしも九峯に限らない。文化九年(一八一二年)宮崎佐土原を發足、九州の南端の開聞岳に先づ登り、北上して阿蘇、西して雲仙に登り、長崎で十年(一八一三年)の正月を迎へ、筑紫を巡拜して久留米、大分を経て英彦、求菩提に登り、中國に渡り、三田尻で十一年(一八一四年)の正月

- を迎ふ。それから山陰道を東し、大山、船上山に登り、敦賀より京都に出で福知山に至る。十二年(一八一五年)に近江路より北陸道に出で六月白山に登り、富山より駕籠渡で飛騨高山に入り、東轉して野麥峠を松本に至り、更に中仙道を甲府に出で、身延、御嶽に參詣す。
- 十二年(一八一六年)更に行脚をつゞけ江戸に出で、高崎を経て日光に出で、足尾、赤城、迦葉、榛名、妙義を経て信濃路に入り、淺間に登り小諸を経て善光寺に詣で、戸隠を経て糸魚川を廻り岩クラより立山に登る(六月)。引返して出羽三山及び鳥海山に登り轉じて新庄より仙臺に入り石巻松島を見物再び山形に返り、會津、那須、水戸、土浦と來てこゝで年を新にし(一八一七年)房總を廻つて江戸に來り、東海道を下り伊豆に至り、返して須山により六月富士に往復、後東海道を下つて志摩で、年を重ね(文政元年一八一八年)紀伊を巡つて熊野、高野に詣で、吉野に入り、奈良より箕面を経て大阪に至り、更に山陽道を西へ四國に渡り大分を経て十一月七日無事故郷に歸る。
- 行程に直したら何軒あるか、旅に出たのが五十七歳であつたから、歸つたのは六十三歳の譯で、北は鳥海から、立山、白山、富士と南は開聞岳に至るまで、この年配で行脚し續けた翁の意氣の旺なること、又驚異とも云ふべきである。(黒田孝雄)

#### 山岳圖書展覽會目錄別冊

定價 並製金五十錢也(送料 上製金壹圓也(四錢))

#### 「山岳」合本用表紙

- 一、上質バックラム(灰青色)
- 二、背、山岳第何年西曆を押す。
- 三、ピラは兩面に會章を押す。
- 四、前後見返し茨木畫伯筆。
- 五、一年分合本用表紙のみを所要の場合、五十錢(送料本會負擔)
- 六、雜誌を本會へ送付される場合製本料共一圓(返送料本會負擔)

#### 「會報」綴込用表紙

- 一、ピラは濃綠色レザー、會章押捺
  - 二、背は濃紺色クロス。
  - 三、代金四十錢(送料本會負擔)
- 御入用の方は振替又は小爲替にて御申越下さい。

#### 「會報」合本

- 一、一號より五十號までの合本表紙出來。
- 二、體裁會報綴込用表紙に準ず。
- 三、代金一圓(製本料、送料共)

#### 振替口座東京四八二九番



# 會務報告

三月定例理事會に就て

三月例会は時節柄不開催の事とし  
書面を以て左の如く事務報告及會員  
除考を行へり。

- 一、山岳編輯報告
- 一、山岳遭難救助機關案報告
- 一、山日記編輯報告
- 一、會員除考

## 代表者變更

盛岡高等農林學校スキー山岳部  
代表者 紀正之

退會者	新着圖書
昭和十一年二月中	第七回體育研究會々誌
(一五二五) 東京市 齋藤威三男	登山とスキー 三月號 黎明社
(一四三九) 愛知縣 健山 覺	山 ケルン編輯室
(一三九三) 熊本縣 山中孝次郎	山小屋 同 ケルン編輯室
	野鳥 同 朋文堂
	同 巢林書房

寫眞月報 同 小西六本店

Appalachia Feb. 1936

Trail and Timberline Feb. 1936

La Montagne Jan. 1936

Die Alpen Feb. 1936

De Bergsteiger Feb. 1936

Revue Alpine (Section Lyonnaise

C. A. F.) No. 304-1er Trim.

1936

Bulletin du Club Alpin Tcheoslo-

ovaque Jan. 1936

Club Alpino Italiano Gen. 1936

Planinski Vestnik 2. Stev. 1936

S. T. F. No 1. Feb. 1936

### 會員寄贈圖書

戸塚武彦氏外著

高サノ身體ニ及ボス影響、第一報

以上 會員 戸塚武彦氏

### 第三回山岳懇談會

(前號八頁参照)

堀田 彌一	逸見真雄	山縣 一雄
中島 雷二	榎本忠亮	湯淺 巖
須賀 幹夫	濱野正男	武藤 晔
小山 昇	岡野正憲	白木 正親
猿田 春彦	大久保廣	喜多又太郎
高木 正孝	織田 明	山口 二郎
小松 晃道	伊藤新一	釣田 正哉
小林 秋男	加藤泰安	兒島 勘次
入江 保太	三崎 勉	杉浦 定夫
三好 一雄	濱口武俊	中島啓四郎
尾關 正二	佐野源一	小林雄次郎
林 俊介	戸塚武彦	福田嘉四郎
中司 文夫	中屋健次	山口 一郎
成瀬 岩雄	安田正介	田中 太郎
石原 巖	櫻井信雄	飯塚篤之助
黒田 孝雄	松方三郎	額田 敏

國慶研二郎

### ◇事務所から◇

- 住所の變更は御通知下さい。
- 會費お拂ひ込み未済の方はなるべく早く願ひます。
- 會員通信は事務室内會報拵宛に願ひます

### ◇編輯室から◇

- 會報第一號から五〇號までの合本用表紙が出来ました。合本して見ると仲々堂々たるものです。七頁の廣告を御覽下さい。
- 「山岳」第三十卷の合本用表紙も出来ました。どしどし合本の御求めに應じて居ます。
- 本號から各頁の肩に號の通し番號を、頁の下に頁數を入れることにしました。將來索引で探す場合此の方がよいと考へてあります。

### 全般投稿規定

- ◇原稿は山岳に關する研究、隨筆、紀行、消息の類に限ります。
- ◇原稿締切 毎月五日
- ◇原稿用紙は十六字詰のこと
- ◇用紙御希望の方には會から御送りします。
- ◇原稿は特に御希望なき限り一切返却致しません。
- ◇原稿の取捨は會報編輯係に御委せ下さい。その他編輯上の一切の事項は編輯係が全責任を負ひます。

昭和十一年三月廿五日印刷  
昭和十一年三月廿九日發行

發行所 松方三郎  
編輯兼印刷者 逸見真雄  
東京市小石川區戸崎町一三  
印刷所 多木印刷所  
東京市芝區翠平町一(不二屋ビル)  
發行所 日本山岳會  
電話・老一六四九番  
廣告一手取扱 進恒社  
電話・四谷・六五四番



山とスキーの月刊雜誌  
一部二十五錢・年三圓

編輯は一に向上と前進を望む同好者を目標に、常に經驗に富んだ登山家のルツクのやうに精選された内容をもつて張りきつてゐる。餘剩部數を刷らないから書店か發行所(大阪市北區堂島上通一丁目大阪府審ビル・ケルン編輯室・振替大阪一七〇七五番)へ申込んでおかぬと手に入らぬことがあるかも知れない。